

「伝承スポーツ」の研究方法に関する一試論

瀬戸 口 照 夫

I はじめに

人類はすくなくとも50万年前には出現していたことが、考古学、人類学、地質学等の研究で明らかにされている。人類はその出現から現代人にいたる間に、さまざまな環境変化に適応し、進化の要因である直立歩行、火や道具の使用、言語の使用を為し遂げ、まさに人間として確立してきたのである。進化要因の成就是、人間の身体運動の発展にも重要な意味をもつ。二足歩行は上肢の活動範囲を拡大し、手の延長として道具を作り出し、それを言語によって、後世へ残していたのである。また、道具や言語の使用は、人間の頭脳の発達にも影響を及ぼすことは知られているところである。

また、人間集団の生活様式の発達の源泉は、これらの進化要因の成就到に他ならない。狩猟、牧畜、採集、漁労、農耕といった生業形態は、進化要因が高度に発達させられた結果である。人間の集団的社会生活は、それらの発達を基本として確立してきたのである。集団的社会生活形態はそれぞれの生業形態に規定され、独自の様式を保持していたことは容易に類推されるところである。生活様式の違いは、そこに生活する人々の行動やものの考え方の違いをも意味する。いわゆる狩猟民、牧畜民、採集民、漁労民、農耕民の思考といった区分が可能となる。とはいっても、それぞれを確然と区分できるものでもなく、それらの融合的思考もあったと思われる。

「人間の運動」と「運動する人間」を研究対象とする場合、身体運動と「人間の思考」との相関性をぬきにして、それを考えることはできない。それぞれの生活様式は、なんらかの基本的思考に基礎づけられているものである。すなわち、一定の生業形態で生活する人々の態度や規範は文化的、社会的環境との連関における「原質的思考」に規定されるものである。人々の生産プロセスや社会生活は、生命維持のための「食糧確得」という絶対的問題に規定されていたといっても過言ではあるまい。「生命維持のための『食糧確得』」という基本的思考は、生産形態における身体運動をもある程度規定したものと考えられる。狩猟民においては、狩猟に必要な身体運動を、漁労民においては、漁労に要求される身体運動を、農耕民においては、農耕に必要な身体運動をそれぞれ必要不可欠なものとして保持していたことは容易に理解できる。

生業形態における「人間の運動」は、その初源において、生活の必要性から生起したといえる。「元来、『走る』とは獲物を取るために追いかける、あるいは敵から逃げるための具体的、全体的活動であり、『登る』とは果実を取るため、あるいは帆をたたむためにのぼる活動であり、『投げる』

とは手の届かないところに物を移し、あるいは敵を攻撃したりするための活動である。だから、それは生産、軍事、日常生活の必要性から生じた実用術である。」⁽¹⁾ このように、制度的、組織的に確立したスポーツとは違って、生活の必要性から生じ、生活と分化してない「スポーツ」(身体運動)の存在を、われわれは確認することができる。そして、これらの未分化な「スポーツ」は、大まかにいって近代スポーツの原型をもなすものであるといえる。

われわれが問題にするのは、このような「スポーツ」であり、あるいはその性格を有していると思われる「運動競技」である。このような研究対象は、主として文化人類学、民俗学、民族学等で取り上げられている。体育・スポーツの研究対象としても取り上げられているにはいるが、さほどの感心も示されず、未開拓の領域にあるといえよう。したがって、本稿においてはこのような対象を研究する場合、どのような方法が必要であり、どのような基本的知識が必要であるかを、筆者なりに整理し、具体的個別的研究を進める糧とすることを目指している。

II 本論の構成

(1) 「方法論」について

一般に学問の方法を論ずる場合、その学問の対象の問題と切り離して考えることはできない。方法と対象は、密接に関連するものであり、別々に考察されるとしても、学問の問題として考える場合にはそれらの相関性を考慮しなければならない。

ところで、学問の成立条件として一般的にいわれることは、研究対象(領域)の独自性、研究方法の独自性、さらに独自の知識体系であり、これらの三つの条件を備えているものが、独立した学問であるとされている。この学問論を完全に否定できるものではないにしろ、歴史、社会、文化的過程の中に存在する「人間」とかかわる学問において、まったく独立した対象、方法、知識体系を備えることはかなり困難であるといえよう。「人間」を直接的にしろ間接的にしろ、研究対象とする学問は、どこかで他の学問と重複する可能性がありはしないだろうか。

また、三つの条件をすべて備えなければ学問として認められないものであろうか。歴史、社会文化的現象は、それを対象とする学問の方法論によって解釈は異なることがあるであろうし、まして、同じ学問の研究者間においても異なることがあるであろう。現象は事実としてあり、その解釈の相異は、結局は方法論の相異に帰因するように思われる。

われわれは、「方法論」ということばを使用したり見聞したりするが、ここで若干考察してみたい。英語の *method*、ドイツ語の *Method* が、「方法」に相当するが、語源的には「ギリシャ語の *meta* (に沿って) + *hodos* (道) である。」⁽²⁾ すわなち、「道に沿って」という意味をもつことばに

由来している。「method（方法）とはある目的を遂げるためのはからい、すなわちその手段、道具、それを実施する順序、それらの工夫、その技などのすべてのことである。」⁽³⁾ 手短かにいえば、目的を成就するための手順を意味する。目的は大まかにいえば知識を確得することであり、方法は知識を確得するための手順であるが、知識はひとりでに存在するものでもなく、ましていつでも発見できるような性格のものではあるまい。したがって、学問における知識確得のための手順、すなわち方法が重要になってくる。さらに重要なのは、認識主体が何を目的とするか、すなわちどのような問題意識で何を研究対象とするかによって、方法は見出されるものであって、「単に独立した方法など考えられない」⁽⁴⁾

「一般に、学問の対象としては、その学者の認識の対象とするところの、いわば学問構成以前の対象と、学問の内容を成すところの構成以後の対象とがあるといわれる。前者に応ずる方法論は、学問の研究方法に関する論であり、後者に応ずる方法論は、学問構成の原理或は学問成立の基礎とか根底にあるものについての論である。」⁽⁵⁾ このように、学問の対象の2側面は、おのずとその方法論をも決定づける。学問構成以前の対象の方法は、資料を収集したり、それを整理したりする方法、いわば技術的な資料操作法といったものである。他方は、研究対象の理解の仕方とか、歴史、社会、文化への位置づけとか、認識主体の視点の論議とかいったいわば認識論的な方法である。

「ごく常識的にうけとられる事実としての歴史、それを史料化されたものを通じて蒐集整理（分類）し、或は分析し或は総合しつつ歴史的発展の世界を構成する、つまり記述としての歴史として行く、そこまでが、学問構成前の対象に即した方法論である。これに対してさういう歴史的世界の体系をさうあらしめる根底はどこにあるのか、その世界のうちに個性的な価値を見出すか、またそれを見出すことがどうして可能であるか、総じてその学問そのものを成立させる根拠を問ふ方法論が、第二の学の内容を対象としてみる場合の方法論である。」⁽⁶⁾ したがって、「方法論」を論議する場合に、この2側面をまず明確にし、また対象との関連の中で考慮していく必要がある。方法論の2つの性格は、確然と区分できる面とそうでない面がある。学問の内容をなす資料は、「記述としての歴史として行く」方法論に基づいた成果であるから、明確には区分できないと考えられる。他方、資料収集のため筆記の仕方とか、テープレコーダでの録音のやり方とかは学問構成の内容の論議とは区分できるものであり、純粹に技術的な方法である。

以上のような研究対象と方法に関する論を考慮しながら、「伝承競技」研究に適応してみたい。

「伝承競技」の概念については別項にゆずるとして、対象としての「伝承競技」は、2つの対象としての性格を持つことになるが、学問構成以前の対象として「伝承競技」を考えた場合、「伝承競技『誌』」という把握の仕方が考えられる。この「伝承競技誌」は、記述としての「伝承競技誌」

としていく方法論に基づいて研究されていかねばならない。この場合の方法論は、対象の「知識化」の手順を論議することになる。対象が知識化されたのちに、この対象の学問的意義や基礎的原理等についての論議が必要となり、それが学問の構成内容についての方法論である。

「伝承競技」を研究対象として扱う既存の学問は、一般的にいて、文化人類学、民族学、民俗学等であることはゆるぎない事実である。この場合、「伝承競技『学』」としてではなく、たとえば民俗学についていえば、「芸能」「競技・娯楽」といった研究分野で取り扱われている。したがって、「伝承競技」は、民間伝承すなわち民俗の一部ということで研究対象となっているのである。

わが国における体育・スポーツの研究領域において、「伝承競技」は研究対象として取り扱われてないことはないが、「対象」としての論議がなされているわけでもなく、またその方法論についての論議があるわけでもない。少数ではあるが、歴史的研究部門で取り扱われているにすぎない。このことは、「日本民俗学」と「歴史学」との関係が反映しているのであろうか。この両者の相違は、大まかにいえば資料の性格にあるとされている。歴史学は一次資料として、歴史的文献を資料とするが、民俗学の場合は、口頭的に行為的にあるいは心意的に伝承されてきたものを直接の資料とする。とはいっても、歴史的文献を資料としないわけでもなく、また、歴史学とて、伝承的資料をまったく排除するものでもあるまい。人間の行動やものの考え方の真理や普遍性を探求する学問が、その囲いを排他的に強固にする必要はどこにもないように思える。「学際」的研究は、学問の歴史的必然性をもって登場してきたと考えられる。

(2) 民間伝承としての運動競技

「競技」に関して日本民俗学が認識対象とするものは、西欧化によって導入された「スポーツ」ではなく、それ以前から存在した「競技」である。すなわち、民俗学が研究対象とするものが、世代から世代へ継承されてきた「三世代以上の伝承文化」⁽⁷⁾であり、「行為的に、或は口頭的に、或は全く内在的な心意のうちに、世代から世代へと反覆的類型的日常的に伝へられうけつがれている」⁽⁸⁾民俗である。したがって、わが国における「伝承競技」に関しても、そのような性格の「競技」に限定しているといつてよい。さらに、「競技」が「地域共同体」によって継承されていることも、研究対象の条件となる。「共同体を共同体らしくさせる規範的意義をもつ」⁽⁹⁾「伝承文化」としての「競技」が認識対象となるのである。

今日見聞でき、以上のような性格を持つ「競技」を日本民俗学は認識対象とするのであるが、「一定の組織的な競技形式を持って今日まで伝承されて来たものは、年占行事としての神事にその発生の起源をおいているものが多く、それが主要な源流をなしている。とはいふものの、今日みる日本の競技は必ずしもそれから一連の信仰行事的なもののほかに、上代貴族の公事的なもの、

中世武士の武術的なもの、さらに近代の欧米風なスポーツなどが、不連続的に錯雑伝流して、今日にその断面を見せているのである。¹¹⁰』といわしめるように、必ずしも認識対象としての条件を全て満す「競技」だけを研究対象とすることだけでは不十分である。子供のあそび、いわゆる「童戯」として残在している「競技」の中には、元来、「大人の社会に年占行事として発しながら、その信仰的な意味が忘れられ、やがて大人の社会から脱落」¹¹¹したものも多くある。「競技」と「遊戯」（童戯をも含む）を確然と区別することは、その発生的起源を溯ろうとすればするほど困難になってくる。したがって、われわれは、「競技」のもつ「遊戯的性格」をも考慮しながら、研究対象としての「競技」を考えていかねばならない。

ところで、「競技」ということばは、「互いに技術を競い、優劣を争うこと、体力・精神力を競う行動」¹¹²として、今日理解されている。語源はギリシャ語の *agôn* であり、それは「集会」や「集会所」を意味していたが、集会や君主の葬式や国民祭あるいは神祭において、ダンスや競技 (*Wettkampf*) が実施されていたので、次第にダンスや競技の意味に移ったものであるとユッツナーは述べている。¹¹³ また、*Athletik* も「競技」と訳すが、これは身体を使用してあることを成就するのに、賭物をめぐって実施され、また娯楽に役立っていたので、特別に賭の獲得において力を成就するという意味をもつという。¹¹⁴ ともかく、「競技」ということばは、語源的にも、宗教的性格や娯楽の意味をもともなっていたといえる。したがって、在来の「伝承競技」が信仰的要素や娯楽的要素をもつことは容易に理解し得るものである。

「伝承競技」を研究対象とする日本民俗学において、「競技」はどのような分類項目に位置づけられているであろうか。柳田國男の分類によれば、「目によるもの」すなわち「有形文化」の中に位置づけられ、¹¹⁵ 和歌森太郎の分類によれば、「文化人的生活伝承」の中の「厚生の伝承」(芸能)の中に位置づけられている。¹¹⁶ 『日本民俗事典』によれば、「芸能伝承」に分類されている。¹¹⁷ また、『日本民俗学講座』における分類でも、「芸能伝承」に位置づけられている。¹¹⁸

「芸能」と「競技」は一見したところ、同じ分類項目に入れるには、不適切なようにも思えるが、しかし、それらを結びつけているものが「ワザ」に他ならない。「ワザは何らかの工夫を凝らされたものであり、当世風にいえば芸にほかならない」¹¹⁹ 「ワザ」は、神を招き、その喜びを表現する手法であり、また、神の意思を窺うのも「ワザ」によってである。競技の「ワザ」(技)も、もともとは神招きのためであり、神の意思を計ろうとするところに、いわゆる勝利の結果を期待するようになった。¹²⁰ 「勝利」することは、当事者だけの問題ではなく、地域代表者の要素をもっての対戦の形式をとる場合が多く、地域全体に関わる問題でもあった。

「競技」は日本民俗学において、「芸能伝承」に分類されるのが、今日の通説となっているといえよう。だけれども、決して「芸能伝承」全体の中だけで理解できるものでもなく、「信仰伝承」

「社会伝承」、「経済伝承」との連関の中で、「競技」の体系的理解が可能になると考える。

以上のように「民俗」の分類において、「競技」の位置づけが明示されたが、ここでさまざまな「競技」や「娯楽」の分類例を明示してみたい。それは、田原久の「競技・娯楽」の分類であり、彼はそれを発生史的分類と機能的分類とのふた通りの分類を試みている。⁽²¹⁾

発生史的分類

(1)民間の年占行事

綱引、石合戦(印地打)、相撲、競馬、闘鶏、舟くらべ、歩射(弓射)、凧上げ、力石、籤、賭事、また特殊なものとして芋くらべ、イタドリくらべ、背くらべなど

(2)上代貴族的なもの

打毬、蹴鞠、双六など

(3)中世武術的なもの

流鏑馬、犬追物、笠懸、剣、柔、槍、弓、水泳など

(4)近世庶民的なもの

ホウビキ、カルタ、花札、拳など

機能的分類

(1)体力競技

相撲、力石(力持ち)、押し合い、奪い合い、綱引、竹打ち、印地打ち(石合戦)、雪合戦、火打ち合い、駆けくらべ、食いくらべ、腕押し(腕相撲)、すね押し、指角力、枕引き、棒押し、棒ねじ、棒引きなど

(2)技術競技

打毬、蹴鞠、流鏑馬、歩射、吹矢、凧上げなど

(3)動物競技

闘鶏、闘犬、闘牛、競馬、小鳥(ウズラ、メジロ、ホオジロ、ノジコなど)の鳴き合せ、くも合戦など

(4)物くらべ

芋くらべ、イタドリ、背くらべなど

(5)賭博的な雑戯

双六、チョボイチ、丁半、貝覆、カルタ、花合せ、ホウビキ、富突き、スリバチ、転がし、ナメカタ、拳など

和歌森太郎は、民俗学の学問対象となるものは、「地域共同体の文化として育まれ、それが共同体の共同体らしさを保つ機能をもっている」⁽²²⁾ 競技が対象となると述べ、さらに、年中行事として「時」を定めて行う競技を、学問対象としての「競技」の範ちゅうに入れ、「時」の定まらない、あるいは「場所」の定まらない「競技」を「娯楽」の範ちゅうに入れて扱うことを主張している。⁽²³⁾ したがって、田原の分類を、「時」と「場所」が限定されている「競技」とそうでない「娯楽」との区分の上に、改めて分類しなければならないことを示唆しているように思える。とはいっても、「童戯」について述べたとおり、「競技」と「娯楽」を確然と区別することは、かなり困難であると思われる。和歌森の主張と田原の分類とをわれわれは学問的意義にかんがみて検討していかなければならない。

(3) 「伝承スポーツ」について

今日、わが国において「スポーツ」ということばは、一般的にあらゆる身体運動に使用されているといってよい。すなわち、「陸上競技・野球・テニス・水泳・ボートレースなどから、登山・狩猟などにいたるまで、遊戯・競争・肉体的鍛練の要素をふくむ運動の総称」⁽²⁴⁾ として解されている。「スポーツ」が一般化する背景には、それぞれの国家や地域の歴史・社会・文化的要素が反映しているといわれる。したがって、定義に関しても統一の見解を引き出すことはかなり困難であるといえよう。わが国だけに限定していえば、その用法は次の3点に集約できそうである。

- ①、娯楽性を強調されるスポーツ
- ②、競技・競争性を強調されるスポーツ
- ③、体力増強・健康促進を強調されるスポーツ

これらの区分は、スポーツ運動の機能から考えたものである。したがって、運動主体の意志のあり方によっては、いずれかの区分の中に固定できるものではなく、変動し得るものであるし、歴史、社会、文化の変動にともなってその強調点が異なるものである。

このように現在のスポーツのあり方は、かなり多様であるが、そのスポーツの発生や起源を追求しようとした場合、語源的意味や「スポーツ技術史」の観点をも考慮する必要がある。

「sport」の語源は、中世ロマンス語に由来しているといわれる。運ぶ、持ち去るを意味するラテン語の *desportare* に由来し、それが気分転換する、気をはらす意味の動詞の *deporter* や *desporter* へと推移し、それから *desport* という男性名詞がつくられた。そして、11世紀ごろにこの *desport* がイギリスにとり入れられて、*disport* に変形し、*di* が脱落して *sporte* になり、16世紀ごろに現代の *sport* という英語が使用されるようになったといわれる。⁽²⁵⁾ 一方、*disport* における *dis* というのは「分離」の意味を示す接頭語であり *away* に相当し、*port* は「運ぶ」意味で *carry* に相当する。

したがって、disport は carry away ということになり、「自分本来の仕事から離れて、気分転換に何かをしたり、気晴しをしたりする」意味をももつという。⁽²⁶⁾ O・E・D⁽²⁷⁾によっても、「慰み・楽しみ、気晴し、気分転換、好色のあそび、愛の交際」等の意味がある。

このように、「スポーツ」ということばには、物や自身を「移動」させる語源の意味から娯楽の意味まで含まれている。また、「遊戯」(play)との連関をも示すものである。遊戯・娯乐的といっても、受動的、観賞的立場において心理的に楽しむという意味をそれほど強調されるものでなく、能動的な身体運動を通して、運動自体を楽しみ、生理的快感を楽しむという意味が強調されている。

スポーツの技術は、同じものを多量につくる「生産」を目的とした、いわゆる機械技術とはちがいが、自由で創造的活動であるといえよう。⁽²⁸⁾「物質生産」を主な目的とする機械技術は、生産加工手段であり、一旦確立してしまうと人間の意志とはかかわりなく存在するものである。しかしながら、「生産技術」は従来の技術を基礎として、改良され発達していくものである。改良するのは人間であることにはちがいわない。しかし、「生産」を目的とする、すなわち同一の物を多量に生産する技術と、スポーツにおける運動課題を為し遂げる技術とは質を異にするものである。たとえば、走り高とびにおける「背面とび」の運動技術とは、助走・踏み切り、空中姿勢・着地という一連の「運動経過」を意味する。この「運動経過」を同一人物であっても、寸分の違いなく為し遂げることは不可能である。まして、違う人が同じ跳躍をしたとしたらなおさらのことである。

スポーツの発生や起源について考える場合、上述のような技術論からだけでは説明しえない部分も出てくる。すなわち、スポーツ技術の初期の段階においては、生産型態と未分化の状態にあった。狩猟民における狩猟は、ひとつの生産型態である。したがって、狩猟具(弓、槍、石)は生産手段である。狩猟具は技術をともなって生産手段となり得るが、この場合同じ物を多量に生産する「機械技術」とはちがうものである。「技術」という観点からしても、スポーツと生産型態の関連は理解できるものであるし、初期的段階におけるスポーツ技術が実用術として意味をもっていたことも理解し得る。そして、狩猟という作業型態における技術は、長年にわたって祖先から子孫へ継承され近年にいたったのである。

「競技」に関しても同様のことがいえる。宗教的性格や娯楽的性格を有する「競技」は、「スポーツ」と密接に連関し、「スポーツ」の概念に内包されるようである。世代から世代へ反復類型的に伝承されてきた「競技」は、スポーツの発生や起源を考える場合の有効な研究対象となるのである。初期のスポーツが現在の組織的制度的に確立したスポーツに発達した直接の原因は、それに対する人間の態度の変容である。人間の態度の変容は、そうあらしめた歴史的社会的文化的環

境の変化をも意味するものと考ええる。したがって、世代から世代へ反復類型的に受け継がれてきている競技、娯楽、遊戯の発生から残存型態にいたるまでの変化を見きわめることは、人間のそれに対する態度の変容をも認識することになるし、また歴史的社会的文化的環境変化をもある程度明らかにし得ると思われる。

(4) 「伝承スポーツ」の研究方法⁽²⁹⁾

世代から世代へ反復類型的に伝承されてきた「スポーツ」を認識対象とする研究方法については、その伝承の性格や意味を考慮することが要求される。伝承的生活型態は、各時代をつらぬきとうし、さほど「一回的特殊的」出来事とは見なされず、「問題解決」の将外に置かれてきたものである。「一回的特殊的」ではない「類型的日常的」生活型態は、あらゆる生活の場面に浸透していて、急速な発展進歩をみなかったものである。このような性格をもつ生活型態は、歴史的性格をまったく保持してないものでもなく、きわめてゆるやかな変遷ではあるにしてもその性格を有するものである。すなわち、それは「歴史の相」の中で「基層文化」として存在し、意識されなくても継承されていくような性格のものである。そのような性格をもつ生活型態の中に「伝承スポーツ」は包含されるものである。したがって、対象としての「伝承スポーツ」の歴史的性格と意味を明確にすることが要求されるのである。

反復類型的日常生活の中における「スポーツ」は、それ自体で意味をもつものではない。換言すれば、体力増強とか体づくりとかいった意味づけがなされたものではなく、生活全体との連関のうちにその意味をなすものである。したがって、「基層文化」としての生活型態との連関の中で「伝承スポーツ」は、その歴史的性格と意味を明らかにしていく必要がある。

「伝承スポーツ」の歴史的性格や意味を明らかにするためには、個々の「伝承スポーツ」を収集し、比較し合うことが必要となる。したがって、単なる比較ではなしに、歴史的性格や意味を明確にできる比較でなければならない。そのために、「伝承スポーツ」の担手の生活型態やそれに対する態度の根本を捉へることが必要である。さらに、個々の「伝承スポーツ」には必ず差異やずれが見出されるものであるから、その差異やずれの性格を考えてみなければならない。

それぞれの生活場所の地理的、経済的条件のちがいによっても、差異やずれは生じるし、担手の社会的、経済的立場のちがいによってもそれは生じる。また、歴史の発展につれて、その発展の中心主体であったものの生活がだんだん変化したにもかかわらず、地理的、経済的に取り残されていった人々の生活がそれほど変化しなく、古い生活型態のままであったという理由で、ずれや差異は生じたと考えられる。⁽³⁰⁾したがって、そのような差異やずれを見きわめることは、地域差や時代差を見きわめることにもなる。

具体的個別的研究を行う際の方法上の基本的考え方として上述の事柄を念頭におかねばならない。「伝承スポーツ」の具体的資料収集の段階においては、2つの方法が考えられる。1つは、収集する対象を全国的に網羅的に収集する方法であり、もう一つは、ある地域においてその収集対象が、どのような社会構造の中で、どのように機能しているかを明らかにするという方法である。前者の場合、「伝承スポーツ」それ自体に重点が置かれ、差異やずれを明らかにするためには有効な方法である。後者の場合、その地域の年間的全体的生活体系との連関を明らかにするためには有効な方法である。「地域共同体」における伝承文化が、その社会との有機的な連関において意味をなすものであるから、後者の方法により、全国的網羅的に収集する方法が最も適切な方法といえよう。

以上のような方法は、研究者が何を目的とするかによって、選抜されるものであるが、どちらにしろ、伝承してきた主体をぬきにしては考えられない。現存する「伝承スポーツ」の歴史的 성격や意味を明確にすることは、究極的には担手たる伝承主体の「伝承スポーツ」に対する考え方が明らかにされ得るものであるし、また、何故そのような考え方が出てきたのか、どうしてそのような「伝承スポーツ」を実施してきたのかといった、スポーツの発生史を考える上に必要な事柄を明らかにすることが可能となるであろう。

III おわりに

人類は、「二足歩行運動」を為し遂げてからさまざまな身体運動を創造してきた。多様な身体運動は、初期の段階においては「作業型態」に基づいた実用術としてのものであった。そして、生業とかかわりのない時間を持ち得るようになった段階で、実用的意味を身体運動が失うこととなり、娯楽的遊戯として純化されていったのである。そして、この余暇時間の増大は、遊戯的身体運動から「スポーツ」としてそれを昇華していく契機になったことは否めない。しかしながら、すべての身体運動が「スポーツ」として純化されたわけではなく、地理的、社会的、文化的諸条件の相異によって、古い形式を保持しつづけた身体運動もあるのである。さらに、宗教的、儀礼的要素をもっていた身体運動は、人間の信仰心意によって、「スポーツ」として純化されることなく依然として「古態」を保っていると思われる。そのような身体運動を含め、世代から世代へ反復類型的に伝承されてきた「伝承スポーツ」は、「スポーツ」の発生や原型を追求する場合にかなり有効な研究対象となるのである。このような「伝承スポーツ」を研究する場合、どのような方法が必要か、ある程度の認識を得たと考える。われわれは、具体的個別研究を進めながら、それと平行して「方法論」を再検討していかねばならない。

引用・参考文献

- (1) 岸野雄三：「スポーツ科学とスポーツ史」 体育学研究第19巻第4・5号 昭和49年 pp. 172～173
- (2) 『哲学事典』 平凡社 昭和51年 p. 1301
- (3) 前掲書 p. 1301
- (4) 和歌森太郎：「民俗学の方法について」『民間伝承』第13巻第4号 昭和24年 p. 2
- (5) 前掲書 p. 2
- (6) 前掲書 p. 2
- (7) 和歌森太郎：「競技と遊戯」『日本民俗学講座4』 朝倉書店 昭和51年 p. 166
- (8) (4)の p. 3
- (9) (7)の p. 167
- (10) 田原久：「競技・娯楽」『日本民俗学大系9』 平凡社 昭和51年 p. 284
- (11) 前掲書 p. 285
- (12) 『広辞苑』 岩波書店 昭和50年 p. 567
- (13) Jüthner, J.: 『Leibesübungen』 Teil I Österreichische Akademie der Wissenschaften 1965年 SS. 13～14
- (14) 前掲書 SS. 11～13
- (15) 柳田國男：「郷土生活の研究法」『定本柳田國男集第25巻』 筑摩書房 昭和47年
柳田國男・関敬吾：『日本民俗学入門』 改造社 昭和17年 pp. 31～35
- (16) 和歌森太郎：『新版日本民俗学』 清水弘文堂 昭和48年 p. 23
- (17) 大塚民俗学会編：『日本民俗事典』 弘文堂 昭和47年 p. 8
- (18) 和歌森太郎編：『日本民俗学講座4』 朝倉書店 昭和51年
- (19) 前掲書 p. 2
- (20) 前掲書 pp. 2～3
- (21) (10)の pp. 286～288
- (22) (7)の pp. 168～169
- (23) (7)の p. 171
- (24) (12)の p. 1203
- (25) 岸野雄三：「スポーツの技術史序説」『スポーツの技術史』 大修館書店 昭和47年 pp. 2～3
- (26) 『新修体育大辞典』 不味堂 昭和51年 p. 764
- (27) 『Oxford English Dictionary』 1933年 pp. 666～667
- (28) (25)の p. 12
- (29) 主として、(4)と和歌森太郎著『歴史研究と民俗学』(弘文堂 昭和46年)を参考文献として記述したものである。
- (30) (4)の pp. 4～5

〔論文受理 1978. 9. 25〕